

# 韓国における小学生・中学生・高校生・大学生の 日本イメージの形成過程

## ー日本への関心度と知識との関連からー

加賀美 常美代・朴 志仙・守谷 智美・岩井 朝乃

### 要 旨

本研究の目的は、韓国の小学生、中学生、高校生、大学生の日本イメージ形成と関連要因を検討することである。韓国の地方都市に居住する小学生から大学生までの計 430 名を対象に日本イメージに関する質問紙調査を行い、日本イメージと日本への関心度要因、知識要因を中心に分析した。その結果、韓国の学生は日本に対して先進的で秩序を守り集団主義的なイメージを持つ一方で、親しみやすさや信頼感は弱く、強固なイメージを抱いていた。特にその傾向は中学・高校生に顕著であった。また、日本への関心度と日本イメージの関連については、日本との積極的接触や日本文化への関心があるほど親和的なイメージが形成される傾向が見られた。さらに、日本への知識と日本イメージの関連については、日本に対する知識が一般的なものであれば集団主義的・先進的で強い日本イメージが形成されやすく親和性を抱きにくい傾向が見られた。一方、日本に対する知識が深まれば親和性を抱き、強い日本イメージが緩和される傾向が示された。

【キーワード】韓国の日本イメージ、イメージ形成過程、日本への関心度、日本の知識、異文化間理解

### 1. 問題の所在と研究目的

昨今、日本の先進技術や漫画・アニメなど日本の大衆文化のアジア諸国への浸透は著しく、これを契機に日本語学習を開始する者も少なくない。特に韓国では 1998 年以来、日本大衆文化の制度的な開放が進行している。韓国は日本語学習者が約 91 万人と世界最多であり、在日留学生数も全体の 15.2% を占めるなど(日本学生支援機構 2008)日本語学習熱の高い地域の一つである。中でも中等教育で第二外国語として学ぶ学習者が多く、初中等教育段階の学習者が全体の 84% を占め(国際交流基金 2008)、従来の就職や昇進を意識した社会・経済的な日本語学習動機に加え、日本文化に対する関心が動機となる傾向が指摘されている(国際交流基金 2008)。

しかし、このような状況の一方で、日韓の新聞社の共同による世論調査では、韓国で「日本を信用できない」、「日本の植民地支配が日韓関係発展を妨げている」とする人は共に 80% に達し、過去の歴史は依然として両国関係に影を落としている(読売新聞 2010)。

韓国における日本イメージには二律背反的な側面があると言われてきたが(鄭大均 1998)、韓国をはじめとするアジア諸国の人々が抱く歴史的経緯に端を

発する対日感情は、在日アジア系留学生と彼らを取り巻く日本人教師をはじめとする人々との関係に微妙な影響を与えている(加賀美 2003、加賀美 2007 など)。このような事態の継続はグローバル社会における両国の人々の良好な対人関係構築を阻むものであり、文化的背景の異なる学習者が抱く日本イメージがどの発達段階でどのように形成されたかを理解することは不可欠である。

韓国人学生の日本イメージには、歴史的なイメージとともに、現代日本や時間的変化の少ない地理的、伝統的特徴が混在している。歴史的イメージとは主に「侵略者」イメージであり、韓国の「国史」教科書に現れる日本像の一つである(岩井・朴他 2008)。過去の調査では、韓国の大学生にとって日本は 16 カ国中最も「嫌い」な国であり、親和性、信頼性が低いこと(岩男・萩原 1982)、高校生・大学生で日本が「嫌い」な学生が 47.36% おり、日本の侵略性が「強い」とした学生が 94.6% であること(日韓相互理解研究会 1992)、大学生の自由記述での日本イメージで植民地支配、歴史認識、戦争に関するイメージが全体の 33.7% に及ぶこと(玄 2005)等が明らかとなっている。ここに、韓国における否定的な日本イメージと侵略者イメージとの重なりが見られる。

一方、現代日本に関するイメージには「先進国」「経済大国」に代表されるようなものがある。これまでに行われた調査(岩井・萩原 1982、玄 2005、日韓相互理解研究会 1991 等)でも経済大国としての現代日本イメージは定着しており、経時的な変化がほとんど見られない(岩井・朴他 2008)。

このように、韓国大学生の抱く日本イメージには多面的で、肯定的な側面と否定的な側面が混在する二律背反的な特徴が拭えない。また、これらの研究からは、学生たちが成長過程のどの段階で、どのような日本イメージを持つようになるのかについてはこれまで明らかにされてこなかった。そこで、加賀美・守谷・岩井・朴・沈(2008)は、2006 年 9 月に韓国のある地方都市において小学生、中学生、高校生、大学生から描画を収集し、描画の内容分析によって、発達の段階ごとに見られる日本イメージについての解明を試みた。収集された描画 3480 例について KJ 法で分類を行った結果、14 の上位カテゴリー(「生活環境」「日本の大衆文化」「自然環境」「歴史認識・領土問題」「伝統文化」「戦争・植民地支配」「日本の象徴」「先進国」「反日感情」「社会的風潮」「日韓の接点」「スポーツ」「秩序・親近感」「不詳」)に整理された。それらはさらに、「肯定的イメージ」「否定的イメージ」「中立的イメージ」に 3 分類された。肯定的イメージは日本に対する好意、尊敬、憧れなどが反映されていると解釈できるもので「日本の大衆文化」「先進国」「秩序・親近感」が該当する。否定的イメージは、日本に対する憤り、嫌悪感、警戒心などが反映されたと考えられる「戦争・植民地支配」「歴史認識・領土問題」「反日感情」「社会的風潮」である。中立的イメージは、肯定、否定のどちらにも明確に当てはまらず、強い好悪の感情は表れていないもので「自然環境」「生活環境」「伝統文化」「日本の象徴」「日韓の接点」「スポーツ」が該当する。分析の結果、これらのイメージの中で中立的イメージが最も多く、次いで否定的イメージ、肯定的イメージの順であった。また、小学生と中学生以降では様相が異なり、中学生で否定的イメージが高まり、その後定着していくのに対し、肯定的イメージは学年を経過しても変化がないことが認められた。

このような発達段階ごとに形成される日本イメージは、学年の経過に伴い増大すると予測される日本に対する関心度や日本に関する知識との間に何らか

の関連が見出されるのではないかと考えられる。この点を解明することで、現在、裾野が広がりつつある韓国の日本語学習者に対し、発達の各段階における傾向・特徴を視野に入れた有効な日本語教育法や相互交流プログラムの開発・実施が可能となるなど、それらを生かした教育支援が期待される。

そこで、本研究では、韓国において小学生、中学生、高校生、大学生を対象に、これらのどの発達段階でどのような内容の日本イメージが形成されているのか、また、日本に対する関心度や日本に関する知識がどのようなものを質問紙調査を通して統計的に分析し、それらの関連を検討することを目的とする。具体的には、以下の 5 点に焦点を当てて検討を行う。

- 1) 韓国の小学生、中学生、高校生、大学生(以下、小・中・高・大学生)の日本に対するイメージ(以下、日本イメージ)はどのようなものか
- 2) 韓国の小・中・高・大学生の日本に対する関心度(以下、関心度)はどのようなものか
- 3) 韓国の小・中・高・大学生の持つ日本イメージと関心度の関連はどのようなものか
- 4) 韓国の小・中・高・大学生の日本に関する知識(以下、知識)はどのようなものか
- 5) 韓国の小・中・高・大学生の日本イメージと知識の関連はどのようなものか

## 2. 方法

2006 年 9 月、韓国のある地方都市(人口 109 万人、2005 年時点)に居住する小学生、中学生、高校生、大学生計 430 名(男性 221 名、女性 207 名、不明 2 名)を対象に、日本イメージに関する質問紙調査を行なった。協力者の内訳は、小学 3 年生 105 名、中学 2 年生 105 名、高校 2 年生 113 名、大学 3 年生・4 年生 107 名である。

本研究で使用した質問票は、先行研究をもとに当該国の留学生へのインタビューを行い、研究者間の討議により作成した。質問票は日本語で作成したものを韓国語に翻訳し、さらに等価性を高めるため、韓国語から日本語に翻訳するバックトランスレーションを行なった。

質問項目は、日本イメージ、関心度、知識、デモグラフィック要因、TV 視聴やインターネットのアクセス度等であるが、本研究では、特に日本イメージと日本への関心度、日本への知識を中心に変数

として扱い統計的分析を行う。日本イメージについては、岩男・萩原(1982)を参考に「科学技術が進んでいる/科学技術が遅れている」「好き/嫌い」など、日本の様相を表すと考えられる 19 対の形容詞項目を挙げ、SD 法により回答を求めた。また、関心度については、加賀美・箕浦ほか(2006)の国際意識調査を参考に 17 項目を作成し 5 段階評定を求めた。さらに、知識については、「小泉純一郎」のように当時の政権を表すものや「となりのトトロ」のように代表的な宮崎アニメなど 12 項目を挙げ、「よく知っている」から「知らない」までの 4 段階評定による回答を求めた。

### 3. 結果

#### 3.1 韓国の小学生、中学生、高校生、大学生の日本イメージ

まず、日本イメージについて 19 の形容詞項目の因子分析(主因子法、バリマックス回転)を実施した。因子負荷量が極端に低かったものを 4 項目削除し、15 項目を分析対象とした。その結果、表 1 のとおり、4 つの説明可能な因子が抽出された。第一因子は、正直な、信頼できる、安全な、好き等の 7 項目で「親和性」と命名した。第二因子は、規則を厳格に守る、科学技術が進んでいる等の 4 項目で「集団主義的先進性」と命名した。第三因子は、明るい、

自由な、の 2 項目で「開放性」と命名した。第四因子は、自己主張が強い、強い、の 2 項目で「強さ」と命名した。

#### 3.2 小・中・高・大学生別の日本イメージ

次に、因子分析結果を小・中・高・大学別に平均値の違いを検討するため、これらの各因子尺度得点に対し、小学生、中学生、高校生、大学生の 4 群別に一元配置分散分析を行い、さらに、Bonferroni 法による多重比較を行なった。

図 1 は 4 群の平均値を示したグラフであるが、全体としては「親和性」が一番低く、次いで「開放性」「強さ」であり、「集団主義的先進性」が最も高い傾向が見られた。また、中学生・高校生・大学生は類似した傾向を持っているものの、小学生だけが異なっている。小学生はイメージ内容ごとに殆ど差異が見られないが、中高生は「親和性」が最も低いのが特徴である。このことは、韓国における歴史教育の開始時期と関連があるのではないかと推測される。すなわち、韓国では小学校高学年から歴史教育が始まるため、本調査対象者の小学生(3 年生)は、歴史についてまだ体系的な教育を受けていない。一方、中学生以降では、歴史教科書の日本イメージが摂取され、これが中学生の日本に対する「親和性」に大きく影響を与えている可能性が考えられるのである。

表 1 日本イメージの因子分析結果

	因 子			
	親和性	集団主義的先進性	開放性	強さ
正直な	.805	.147	.022	.104
信頼できる	.764	.087	.063	.059
安全な	.747	.115	.109	.027
好き	.683	.006	.258	.048
あたたかい	.634	.171	.323	.121
親切的な	.523	.443	.185	.128
穏やかな	.500	.279	.493	-.160
規則を厳格に守る	.193	.717	-.005	-.010
科学技術が進んでいる	-.032	.652	.148	.241
集団の結束力が強い	.070	.494	.041	.181
勤勉	.253	.491	.072	.347
明るい	.369	-.021	.639	.085
自由な	.033	.107	.557	.196
自己主張が強い	-.167	.149	.093	.509
強い	.125	.220	.073	.454
$\alpha$ 係数	0.878	0.718	0.567	0.451
寄与率	23.1%	12.4%	8.2%	5.3%

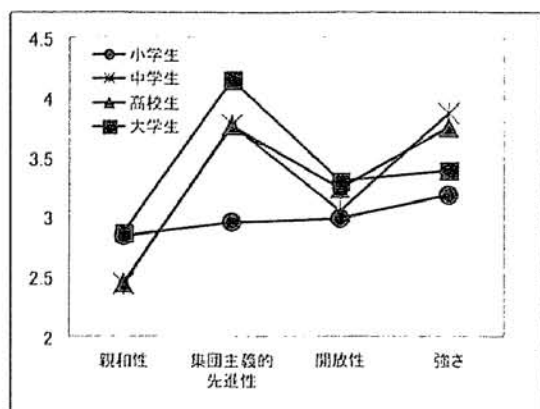


図1 日本イメージの小・中・高・大学生の  
平均値の差

分散分析結果と多重比較については、「親和性」は、4群に有意差があり( $F(3, 407)=8.75$ ,  $p<.001$ )、「集団主義的先進性」についても4群の有意差が見られた( $F(3, 417)=44.77$ ,  $p<.001$ )。また、Bonferroni法による多重比較では、集団主義的先進性は中学生、高校生、大学生より小学生のほうが低い傾向が認められ、中学生、高校生より大学生のほうが高い傾向が見られた。これは、小学生は日本に関してまだ知識を十分に持っておらず、対照的に大学生は専門的な知識が豊富になっているためだと考

えられる。「開放性」については有意差が認められなかった。また、「強さ」については4群の有意差が見られた( $F(3, 423)=11.39$ ,  $p<.001$ )。多重比較では、小学生より中学生、高校生のほうが高い傾向が認められた。また、大学生より中学生、高校生のほうが高い傾向が認められた。

### 3.3 日本に対する関心度

日本に対する関心度については17項目の因子分析(主因子法、バリマックス回転)を実施した。内容の妥当性、因子負荷量が極端に低かったもの1項目を削除し、16項目を分析対象とした。その結果、表2のとおり、3つの説明可能な因子が抽出された。第一因子は、日本人と友達になること、日本への留学など5項目で、これらを「日本との積極的接触」と命名した。第二因子は、開発途上国の貧困や教育、日本と韓国の領土・歴史・教科書問題など、日本のみならず、よりグローバルな視点での国際社会・国際問題への関心に関わる6項目で、「国際社会問題」と命名した。第三因子は、日本の伝統文化、日本の様々な生活様式や習慣などの5項目で、「日本文化」と命名した。

### 3.4 小学生・中学生・高校生・大学生別の関心度

抽出した関心度因子に関して、小・中・高・大学別に平均値の違いを検討するため、これらの各因子尺

表2 日本に対する関心度の因子分析結果

	因子		
	日本との積極的接触	国際社会問題	日本文化
日本人と友達になること	0.64	0.14	0.4
日本への留学	0.64	0.12	0.2
日本各地への旅行	0.62	0.3	0.31
日本語を学ぶこと	0.54	0.22	0.27
日本のファッション	0.46	0.08	0.33
開発途上国の貧困や教育	0.12	0.63	0.06
日本と韓国の領土・歴史・教科書問題	0.17	0.59	-0.04
日本の政治や経済・社会問題	0.18	0.57	0.05
民族紛争や戦争、テロによる世界平和の危機	0.08	0.56	-0.01
地球温暖化など環境問題	-0.04	0.52	0.17
日本のいじめなどの教育問題	0.28	0.4	0.08
日本の伝統文化(歌舞伎、能、茶道、生け花など)	0.31	0.21	0.57
日本の様々な生活様式や習慣	0.36	0.34	0.54
日本の大衆文化(音楽、ドラマ、アニメ、映画など)	0.19	0.02	0.53
日本のテレビ番組や芸能人	0.34	0.03	0.47
日本のゲーム	0.11	-0.05	0.46
$\alpha$ 係数	0.811	0.744	0.71
寄与率	14.2%	13.6%	11.6%

度得点に対し 4 群別に一元配置分散分析を行い、Bonferroni 法による多重比較を行なった。その結果を図 2 に示す。平均値の多重比較による有意差を見ると、日本との積極的接触では小学生・中学生が高校生・大学生より低かった ( $F(3, 395)=24.25$ 、 $p<.001$ )。国際社会問題では小学生が最も低く、次いで中学生・高校生で、大学生が最も高かった ( $F(3.405)=50.55$ 、 $p<.001$ )。日本文化では、4 群間に有意差は見られなかった。

このように、大学生が日本との積極的接触、国際社会問題について最も関心度が高い傾向が見られた。

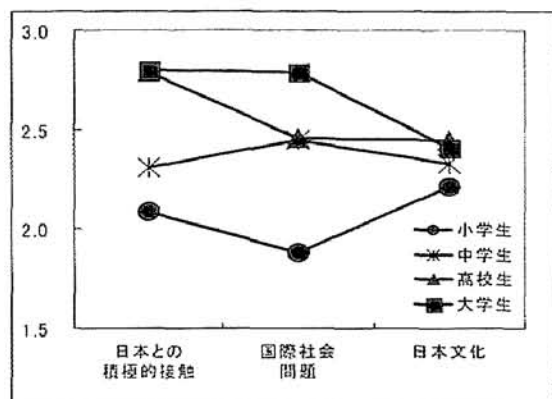


図2 関心度の小・中・高・大学生の平均値の差

### 3.5 日本イメージと関心度との関連

日本イメージと関心度との関連について検討するため、日本イメージ因子を目的変数、関心度因子を説明変数とした重回帰分析を行った。その結果、表 3 のように、「親和性」を規定する要因は「日本との積極的接触」、「日本文化」で、正の影響を及ぼしていた。「集団主義的先進性」を規定する要因は「日本との積極的接触」、「国際社会問題」で、正の影響を及ぼしていた。「開放性」を規定する要因は「日本との積極的接触」で、正の影響を及ぼしていた。一方、「強さ」と関心度との関連は見られなかった。このことから、日本との積極的接触を持ち、日本文化に関心を持つ人ほど親和性イメージが高い傾向が見られた。一方、日本との積極的接触を持つとともに国際社会問題に関心が高い人は、集団主義的先進性イメージが高い傾向が見られた。

### 3.6 日本に関する知識

日本に関する知識については、12 項目の因子分析(主因子法、バリマックス法)を実施した結果、表 4 のとおり、3 つの説明可能な因子が抽出された。

表 3 日本イメージと関心度との関連

	親和性	集団主義的 先進性	開放性	強さ
日本との積極的接触	0.303***	0.202**	0.2**	0.029
国際社会問題	-0.067	0.307***	0.023	0.045
日本文化	0.194**	0.074	0.079	0.066
R <sup>2</sup>	0.185***	0.218***	0.071***	0.012

\*\*<0.01 \*\*\*<0.001

第一因子は、東京、ソニーなど 5 項目で、日常に浸

表 4 日本に関する知識の因子分析結果

	因子		
	一般的知識	社会的関心に基づく知識	個人的関心に基づく知識
小泉純一郎	<b>0.764</b>	0.359	0.138
東京	<b>0.741</b>	0.396	0.163
ソニー	<b>0.723</b>	0.369	0.171
すし	<b>0.67</b>	0.435	0.176
となりのトトロ	<b>0.531</b>	0.011	0.398
NHK	0.304	<b>0.736</b>	0.199
自民党	0.224	<b>0.577</b>	0.086
中国英寿	0.255	<b>0.571</b>	0.123
伊藤博文	0.486	<b>0.565</b>	0.036
木村拓哉	0.181	<b>0.519</b>	0.385
ゲド戦記	0.107	0.075	<b>0.566</b>
おたく	0.13	0.337	<b>0.419</b>
α 係数	0.883	0.805	0.440
寄与率	24.1 %	21.0 %	8.1 %

透し、特に自ら調べなくても接することの多い項目から成る。これらを「一般的知識」と命名した。第二因子は、NHK、自民党などの 5 項目で、一般的知識よりは深く、マスメディア等に頻出し、一般に知られている事柄を指すものである。これらを「社会的関心に基づく知識(以下、社会的知識)」と命名した。第三因子は、ゲド戦記(2006 年調査当時の最新の宮崎アニメ)、おたくなどの 2 項目で、調査時点で特に日本に興味のある人でないと知らないような項目である。これらを「個人的関心に基づく知識(以下、個人的知識)」と命名した。これらの 3 因子は、日本への知識の深度により分かれていると言える。



### 3.7 小学生・中学生・高校生・大学生別の知識

日本への知識の因子分析結果について小・中・高・大学別に平均値の違いを検討するため、これらの各因子尺度得点に対し4群別に一元配置分散分析を行い、Bonferroni法による多重比較を行なった。その結果、図3のとおり、全体としては「個人的知識」が一番低く、次いで「社会的知識」「一般的知識」であり、「一般的知識」が最も高い傾向が見られた。また、中学生・高校生・大学生は類似した傾向を持っているものの、小学生だけが異なる傾向が示された。すなわち、小学生では3つの知識の間に差異がほとんどなくいずれも低く、中学生から知識が蓄積される傾向が見られる。また、大学生になると一般的知識、社会的知識が高くなる傾向が見られる。

平均値の多重比較による有意差をみると、一般的

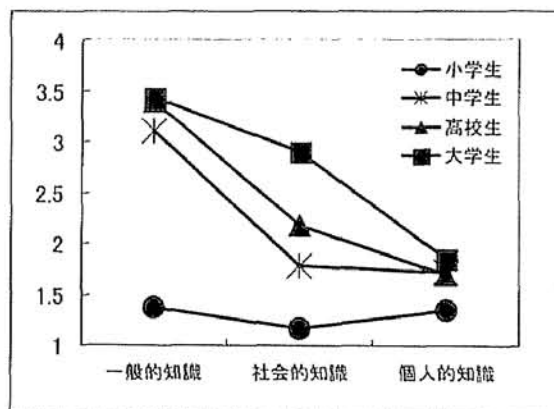


図3 知識の小学生・中学生・高校生・大学生の平均値の差

知識では、高校生・大学生が最も高く、次いで中学生、小学生の順となった( $F(3, 419)=354.24, p<.001$ )。社会的知識では、大学生が最も高く、高校生、中学生、小学生の順である( $F(3.417)=180.87, p<.001$ )。個人的知識でも、小学生が中学生、高校生、大学生より低い傾向が見られた( $F(3.423)=8.39, p<.001$ )。

### 3.8 日本イメージと知識との関連

最後に、日本イメージと知識との関連について検討するため、日本イメージ因子を目的変数、知識因子を説明変数とした重回帰分析を行った。その結果、表5のように、「親和性」を規定する要因は3つの知識で、一般的知識は「親和性」に負の影響を及ぼし、社会的知識、個人的知識は正の影響を及ぼしていた。「集団主義的先進性」を規定する要因は

一般的知識、社会的知識で、いずれも正の影響を及ぼしていた。「開放性」は知識との関連は見られなかった。「強さ」を規定する要因は3つの知識で、一般的知識が正の影響、社会的知識と個人的知識が負の影響を及ぼしていた。このことから、一般的知識のような表面的なものではなく、社会的知識・個人的知識のようなより深い知識を持つ人のほうが日本に対して親和性イメージを抱きやすい傾向が見られた。一方、一般的知識、社会的知識を持つ人のほうが、集団主義的先進性イメージを抱きやすい傾向が示された。さらに、社会的知識、個人的知識を持たず、一般的知識を持つ人のほうが強国としての日本イメージを形成していることが示された。

表5 日本イメージと知識との関連

	親和性	集団主義的先進性	開放性	強さ
一般的知識	-0.225**	0.363***	0.081	0.431***
社会的知識	0.160*	0.189**	0.049	-0.280***
個人的知識	0.102†	-0.073	0.022	-0.131*
R <sup>2</sup>	4.537***	41.657***	2.345	15.489***

†<0.1 \*<0.05 \*\*<0.01 \*\*\*<0.001

### 4. 考察及び今後の課題

本研究において、韓国の小・中・高・大学生の日本イメージを量的に分析した結果、「親和性」「集団主義的先進性」「開放性」「強さ」の4因子が抽出された。小・中・高・大学生別に検討したところ、小学生のイメージは4因子の差が見られず、まだ日本に対してイメージが十分に意識化されていないことがうかがえる。しかし、中学生と高校生は「親和性」が最も低く、大学生になるとやや好転する傾向が見られる。このことは、中学生など多感な時期に教育やマスメディアから得られる知識が豊富になり、戦争や植民地支配に関連するイメージがより敏感に摂取されるためと考えられる。それとともに、9歳から10歳以降が文化を取り込む敏感期(箕浦, 1984)であり韓国の文化的価値を積極的に取り込んでいく時期に当たることも考えられる。

ただし、大学生になると広範な知識が獲得され、親和性の低さが幾分好転する可能性も推測される。同様の傾向は、先行研究での描画の分析でも見られ(加賀美・守谷他 2008)、親和的な日本イメージの度合いは発達段階における歴史的な日本イメージの摂取と関連する可能性を示すものと言える。

また、日本への関心度については、本研究では「日本との積極的接触」「国際社会問題」「日本文化」の3因子が抽出され、学年が上がるほど日本に積極的に接近し、日本や国際社会問題に関心を持つ傾向が見られた。関心度と日本イメージの関連については、日本との積極的接触や日本文化に関心がある人ほど親和的イメージが形成される傾向が見られた。このことは、日本語学習や留学、友達になること、旅行やファッション等の直接的な接触体験が肯定的イメージに寄与することを示唆しており、日本語教育場面においても、異文化接触体験や日本文化理解をどのように取り入れるかが日本のイメージ形成に影響する可能性を示すものである。

さらに、知識については「一般的知識」「社会的関心に基づく知識」「個人的関心に基づく知識」の3因子が抽出され、学年が上がるにつれてこれらの知識が豊富になる傾向が見られた。知識と日本イメージの関連については、日本に対する知識が一般的なものであれば、集団主義的・先進的で強いイメージを抱きやすく、親和性を抱きにくいことが示された。一方で、日本に対する知識が深まれば、親和性を抱き、強国イメージが緩和される傾向が認められた。このことは、日本への知識が単純に多くあればよいというものではなく、自分から関心を持って接近することによる深い知識の獲得が肯定的な日本イメージ形成に関連すると言える。

以上のように、韓国の日本イメージ形成について、中学、高校生で形成された否定的イメージは、大学生で自ら日本への関心を持ち接触した知識の獲得によって好転する可能性があることが示された。このことは、個人的な接触により詳細かつ現実的な知識が増加することで視野が広がり、日本に対する既成の否定的イメージが修正される可能性を示すと解釈できる。

最後に、韓国の小学生・中学生・高校生・大学生の日本への関心度と日本に関する知識という2つの要因を加味することで得られた本研究結果を、日本語教育との関連から検討したい。まず、日本への関心度との関連では、教師が異文化接触体験につながる日本語学習の意義を意識化することの重要性である。日本語学習の有無と異文化接触体験との関連を見た別の研究でも、これと同様の結果が示されている(加賀美・朴ほか 2008)。また、日本に関する知識との関連では、すでに一般的な日本の知識を持つ

ている学習者と、個人的関心に基づく日本への知識を自発的に収集し取りこんでいる学習者では、日本語教育の場で教師が同じ内容を扱ったとしても、学習者によって肯定的にも否定的にもイメージ形成がされるため、その教授方法は単純ではなく、慎重を要する。教師は、そのことを念頭に置く必要がある。つまり、学習者の個別の関心や多様性を容認し、教師自身がそれを十分理解していなければ、学習者の中で否定的イメージが形成され、それが固定化され強化される可能性もあるということである。

今後の課題としては、本研究の知見を活かし、学習者自身が自ら必要とする知識を求め、学習し、自らが判断し、選択するようなタイプの教育プログラムの開発が求められる。具体的には、表面的接触ではなくステレオタイプを崩すような個人的な経験を伴う参加型の交流プログラム、より上位の普遍的な枠組みや多文化理解の枠組みでの二国間に留まらない教育プログラムなど多様なプログラムが考えられる。このようなプログラムの開発と実施、評価を継続していくことで、東アジアを中心とした学生たちの相互理解と共通認識が促進されるものと考えられる。

#### 付記

本研究は、2006年度-2009年度お茶の水女子大学特別教育研究事業「コミュニケーション・システムの開発によるリスク社会への対応」の異文化間コミュニケーション・プロジェクト「対日イメージの規定要因とコミュニケーションのあり方に関する研究」(研究代表者：加賀美常美代)の研究成果の一部である。

#### 参考文献

- 岩井朝乃・林志仙・加賀美常美代・守谷智美(2008)「韓国『国史』教科書日本像と韓国大学生の日本イメージ」『言語文化と日本語教育』35号、お茶の水女子大学日本語文化学会、10-19
- 岩男寿美子・萩原滋(1982)「韓国大学生の対日イメージ」『慶応義塾大学新聞研究所年報』通号 18、23-35 慶応義塾大学新聞研究所
- 岩男寿美子・萩原滋(1988)『日本で学ぶ留学生』勁草書房
- 加賀美常美代(2003)「多文化社会における教師と外国入学生との葛藤事例の内容分析：コミュニティ心理学的援助に向けて」『コミュニティ心理学研究』日本コミュニティ心理学会7-1号、1-14
- 加賀美常美代(2007)『多文化社会の葛藤解決と教育価値観』ナカニシヤ出版
- 加賀美常美代・林志仙・守谷智美・岩井朝乃・沈貞美(2008)「韓国の小・中・高・大学生の日本イメージと関連する要因—日本語学習と異文化接触に焦点を当

- ててー」,『日本語教育学会国際研究大会予集』2, 182-185
- 加賀美常美代・箕浦康子・三浦徹・後塚英子(2006)「グローバル文化学に関心のある学生はどのような学生か? : 新入生国際意識調査から」『人文科学研究』2, 246-265
- 加賀美常美代・守谷智美・岩井朝乃・朴志仙・沈貞美(2008)「韓国の小・中・高・大学生の日本イメージ形成過程 : 9 分割統合絵画法による分析から」『異文化間教育』28 号, 60-73
- 国際交流基金(2008)『海外の日本語教育の現状－日本語教育機関調査・2006 年―改訂版』凡人社
- 鄭大均(1998)『日本(イルボン)のイメージ－韓国人の日本観』中央公論社
- 箕浦康子 (1984)『子供の異文化体験』思索社
- 日韓相互理解研究会(1992)『日韓相互理解アンケート調査集計結果報告書』
- 日本学生支援機構(2008)『平成 20 年度外国人留学生在籍状況調査結果』  
[http://www.jasso.go.jp/statistics/intl\\_student/documents/daa08.pdf](http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/documents/daa08.pdf) (2008 年 12 月 30 日閲覧)
- 朴志仙(2006)「日本大衆文化を扱った授業の受容度に関する韓国入学者の意識」『日本研究』6 号, 高麗大学日本学センター, 135-151
- 玄大松(2005)「韓国人の血・地・知,そして日本-韓国人のアイデンティティ・独島意識・日本イメージに関する実証分析」『東洋文化研究所紀要』Vol.148, 75-141
- 森谷寛之(1989)「九分割統合絵画法と家族画」『臨床描画研究』4 号, 金剛出版, 163-181
- 読売新聞 2010 年 4 月 17 日 「日韓関係「良い」日本 57%、韓国 24%」読売オンライン  
<http://www.yomiuri.co.jp/national/news/20100416-OYTIT01475.htm> (2010 年 5 月 3 日閲覧)

かがみ とみよ／お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科

kagami.tomiyo@ocha.ac.jp

ぱく ちそん／鳥取県文化観光局国際観光推進課ソウル駐在員

pakjisun@hotmail.com

もりや ともみ／早稲田大学日本語教育研究センター

moriyat@aoni.waseda.jp

いわい あさの／お茶の水女子大学大学院人間文化研究科国際日本学専攻

asano-iwai@msc.biglobe.ne.jp

## How South Korean Elementary, Junior High School, Senior High School and University Students' Perceptions of Japan are Formed: In Relation to Interests and Knowledge of Japan

KAGAMI Tomiyo · PAK Jisun · MORIYA Tomomi · IWAI Asano

### Abstract

The objective of this study is to investigate Korean young people's images of Japan using quantitative method and contribute mutual understanding between Japan and Korea. Respondents of this research are 430 elementary school, junior high school, senior high school and university students living in province area in South Korea in September 2006 and data were analyzed from the point of relation among images, interest and knowledge of Japan. There were between 104-113 respondents from each of the four groups.

Their Images of Japan are advanced country, preserving public order and collective culture. Meanwhile, they feel strength of Japan and less familiarity and reliability. This tendency is more remarkable for junior high and senior high school students. In relation to interests in Japan, students who are interested in active people exchange and Japanese culture tend to have more familiar and reliable images. In relation to knowledge of Japan, students having general knowledge of Japan tend to have collective, advanced, strong image and not to have familiar and reliable images. On the other hand, students having knowledge based on personal interest have familiar and reliable images and those



knowledge seem to weaken strong images.

This is supposed to an English abstract. This is supposed to an English abstract. This is supposed to an English abstract. This is supposed to an English abstract. This is supposed to an English abstract. This is supposed to an English abstract. This is supposed to an English abstract. This is supposed to an English abstract. This is supposed to an English abstract. This is supposed to an English abstract.

[Key words] Images of Japan in Korea, Image forming process, Interest in Japan, Knowledge of Japan,  
Intercultural understanding

(KAGAMI: Ochanomizu University,

PAK: Tottori Prefectural Government International Tourism Advancement Division Seoul Resident reporter,

MORIYA: Waseda University,

IWAI: Graduate School of Ochanomizu University)